

産地, 今(8)

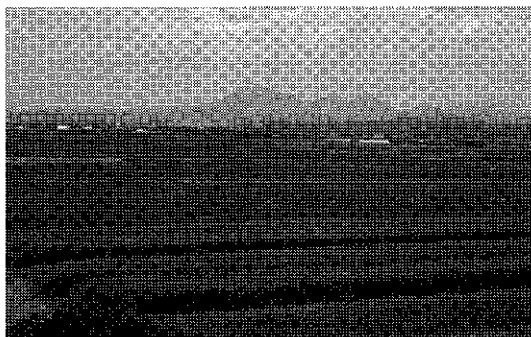
リレー随筆

大分県の根深ネギの産地から

(大分県農業技術センター植物防疫部 よしまつりであき 吉松英明)
兼 営農指導課病害虫専門技術員

The Introduction of Welsh Onion — Producing District in Oita. By Hideaki YOSHIMATSU

(キーワード：産地だより, 大分県, 根深ネギ)



干拓地でのネギ栽培風景

大分県は沿岸平坦部から標高 800 m の高冷地まで標高差のある地形を有し、県下全域でそれぞれの地域特性を生かした多種、多様な野菜の栽培が行われている。施設野菜ではこの 10 年間で生産が大きく拡大し、イチゴ、トマトなどの施設栽培面積は急激に増加している。露地野菜ではキャベツ、ハクサイなど重量野菜が減少し、全体としては生産量が減少しているものの、一部の品目では平坦部から高冷地まで栽培時期を異にするリレー栽培も行われている。特に近年は根深ネギの栽培に力が入れられており、大規模経営が増加している。これまでは、冬季を中心として周年出荷体制がとられ、夏から秋にかけては出荷量が少ない端境期であったが、中山間地から高冷地へと栽培地域が拡大し、年間を通じて安定的に供給するための産地形成が確立されてきた。

I 根深ネギの主な病害虫

大分県国東半島の西側に位置する西国東地域の約 400 ha といった広大な干拓地では、古くから根深ネギの栽培が行われている。近年では前述のとおり、周辺の宇佐地域や玖珠九重地域などの中山間地から高冷地にかけての地域において栽培面積が拡大している。

ここでは西国東地域の干拓地を中心に、近年問題となっている病害虫とその対策および取り組み状況について紹介する。

1 べと病

べと病は主に春先から梅雨期に発生する病害として従来から防除が行われてきた。防除薬剤としてジネブ水和剤、マンゼブ水和剤が従来から使用されてきたが、ホセチル水和剤、アゾキシストロピン水和剤などの治療効果のある薬剤がこれに加わり、現在防除が行われている。しかし、昨年および本年においては 3 月



写真-1 ネギべと病

に入り、短期間のうちに急激に発生がまん延し、病害虫防除所から防除督促や注意報が発表されるなど、これまでとはやや異なる発生様相が見られている。そのため防除が遅れて品質低下の要因となっている。これまで以上に本病を対象とした防除の徹底が必要である。

2 小菌核腐敗病

1993 年は冷夏長雨年であったが、その翌年の年明けに収穫する作型で本病は大発生し、葉鞘部の腐敗や裂開による抽出葉の突出など、収量、品質に大きな影響を与え、生産者の生産意欲の低下にまでつながった。本症状の原因については当時不明であったが、後に千葉県で *Botrytis squamosa* が本病の病原菌であることが明らかにされた。その後、大分県でも本症状が千葉県で明らかにされた菌と同一であることが判明した。現地からは本病の防除対策確立についての強い